



むぎの郷

“麦の郷とは” 住民のニーズから
生み出され、住民の手によって育てられる

October 2019

ソーシャル ファーム ピネル/くろしお作業所/麦の郷訪問看護ステーション/麦の郷居住福祉事業所/はぐるま共同作業所/はぐるま共同作業所 和の社/はぐるま共同作業所 ラ・テール/麦の郷印刷/障害者就業・生活支援センター つれもて/麦の郷 和歌山生活支援センター/麦の郷紀の川生活支援センター/ハートフルハウス 創/むぎピース/障害児者サポートセンター「麦の郷」/こじか園/第二こじか園/ソーシャルファームもぎたて/Po-zkk/六星舎/叶夢向/創cafe/事務所/麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所

通信

揮毫：伊藤静美 発行/麦の郷情報管理委員会 TEL(073)474-2466 FAX(073)474-4637
〒640-8301 和歌山市岩橋643 <http://www.muginosato.jp>



和歌山生活支援センター + 六星舎
合同レクリエーション 9.7(土)



くろしお作業所 旅行
9.12(木)～13(金)・19(木)～20(金)



立命館大学 山本ゼミ
フィールドワーク 9.22(日)



きょうされん大会 in 愛知
10.25(金)～26(土)

私たちのめざすもの ～麦の郷4つの理念～

- 1).麦の郷は、日々学び、育み、発信し続ける人材を育成し、地域福祉の発展を目指します。
- 2).私たちは、ものづくりを通じて障害のある人と地域の共存を実現し、互いに豊かになる実践を目指します。
- 3).私たちは、社会的不利の状態におかれている人々の課題を解決するために、広範な人々をつなぐを深め、ともに社会変革をめざします。
- 4).麦の郷は、全ての人々が平和で安心して暮らせる社会づくりのために人の輪を紡いでいきます。



きょうざれん 第43回全国大会inわかやまに向けて

2020年10月23日(金) 24日(土)の2日間、田辺市スポーツパークをメイン会場に、「きょうざれん第43回全国大会inわかやま」が開催されます。

和歌山に作業所が生まれて43年目、その歴史の中で1985年(第8回) 白浜町、1991年(第14回) 高野町、2000年(第23回) 和歌山市と3回の全国大会を開催してきました。

今回で全国でも最多の開催数に。56年ぶりの東京オリンピックの年に、記憶に残る大会を和歌山でやるうーと支部の総意で決めました。交通の便も決して良いとは言えない田辺をメイン会場にして開催しますが、不便さを知ってもらうことと同時に不便な地でも元気や勇気を持って帰ってもらえる全国大会ができることを証明したいー和歌山ならではの発想力を活かしながら大会準備に入っています。

《今大会の意義》
○和歌山の共同作業所運動が作り上げてきた歴史やその遺産を検証し、後世へ伝える大会となること

○平和の意味を考え、平和な時代を終わらせようとしている危険な流れを止め、安全・安心の日本を描くことを使命とする大会となること

○障害者権利条約の精神を地域のすみずみに。権利条約に矛盾する法制度を廃止し、新たな法律を創造する大会であること

○大会が開催されるこの地域は、いにしえの時代の熊野につながる道があり、民衆の心と体を癒し、再生する場所であった

その歴史に学び、新たな息吹をつくる大会に「きょうざれん大会だからこそ、話せる言葉がある」
きょうざれん大会だからこそ、一緒につたえるつたがある

きょうざれん大会だからこそ、つながる力がある
を、確かめ合う大会とします。

過去の大会でのつながりが、和歌山の福祉の前進につながりました。

8月20日に開かれた第1回実行委員会、きょうざれん常務理事 塩田千恵子さんから「2021年度報酬体系改悪にストップをかける大会に」と激励の言葉をいただきました。

また、新幹線が通るような都市部ではなく、少し不便な地域での開催は「障害者権利条約を地域のすみずみに」というきょうざれんのサブテーマのように、きょうざれん運動が地域のすみずみで展開されていることの証になるのではないのでしょうか。

そんな、和歌山大会に向け、県内加盟事業所職員による事務局、様々な団体のご参加をいただいた実行委員会が結成され、実行委員長には和歌山大学の山崎由可里先生に就任いただきました。

ただいま事務局では、参加・資金組織部、会場・交通・展示販売部、要員・ボランティア・救護部、広報・記録部、利用者実行委員会援助部、企画I部、企画II部、企画III部の8つの部で大会へ向けての準備を進めています。テーマソングの歌詞や、マスコミキャラクターの案を募集して、事務局員以外のたくさんの方にも参加してもらいたいと思っています。

開催の意義は少々かたいかも知れませんが、みんなが楽しめる大会にしたいと思っていますので、これからも色々な呼びかけにぜひ協力を

お願いいたします。

(きょうざれん第43回全国大会inわかやま 企画I部 長谷 理世)

わされん職員研修会
「仕事の思いを共有しよう！」
みんな集まろう中堅職員へ
に参加して

9月28日(土) 田辺市民総合センター2階、交流ホールにて行われた、わされん中堅職員研修会に参加しました。

初めに、社会福祉法人 旬穂会 わかばの小川進太郎氏の「仕事の思いを共有しよう」の講演でした。小川氏の自己紹介からわかざれんとの出会い、これまでの経験について話され、特に印象に残っているのは、専門分野ではないことやわからないことは他の事業所の先輩職員に聞いていくということ。自分自身の引き出しはたくさんあったほうがいいことやつながりを持つことの大切さを学びました。

グループワークでは1つのグループに6名、7名で4つのテーマ①「職場におけるコミュニケーション」

②「後輩の育成」③「自分のやりがい」④「利用者の支援」に分かれて話をしました。私が参加したグループは③「自分のやりがい」



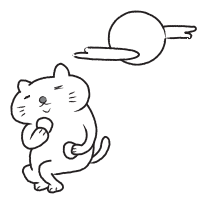
最終的には「公助」(社会福祉と生活保護制度)で補完するという構図を描いています。ここでいう「公助」とは本人だけではなく家族が含まれている点に注意しなければなりません。自民党の改憲草案では、24条では現行規定を廃止して、家族相互の助け合いを義務付けています。この改憲案が実現したら25条で何をどのように規定しても生活維持は家族責任であるから、国家責任で国民の生存権保障を行う義務を回避できると判断しているのです。この理論は福祉にとどまらず、教育や住宅、子育て・老後生活の確保は本人・家族責任という事になると話されていました。



講義では、社会の歴史やその背景から福祉について考え、福祉を学ぶためには社会への深い認識が必要であることを知る機会となりました。当たり前だと思ってしまう生活してきましたが、矛盾に気づきを持つことが出来る機会となりました。講義の内容はとても濃密な内容で大変勉強になりました。2回分の講義についてしっかりお伝えできればよかったです。

が、字数が足りませんでした。麦の郷福祉大学も残すところあと1回!!次回は11月23日(土)です。ぜひご参加ください!

(麦の郷の川生活支援センター 神田 宗忠)



麦の郷福祉大学に参加して

第2回麦の郷福祉大学が9月28日(土)に開催されました。講師は立命館大学特任教授の唐鎌直義先生で、テーマは「人々の暮らしと福祉ー私たちの暮らし」



(むかし)ス 岡本 悠

です。まず、グループでなぜ福祉を選んだのかを話すなかで、徐々に、仲間の成長を感じたとき、お給料でほしいものを買えた報告してくれた仲間の嬉しそうな顔が見れたとき、他団体と協力して自主製成品を販売したときなど、たくさんやりがいにつながる話が出ました。日々の業務に追われると忘れがちになる、仲間のこと、職員のつながりがあるからこそ、自分のやりがいに繋がっているのだと改めて感じました。

最後には各グループからの発表がありました。中堅職員だからこそ抱える悩みや葛藤があります。職歴の差は多少あるものの、同じように悩みを抱えた中堅職員が自分の思いを吐き出し、共感できることで安心したり、横のつながりの大事さを感じたり。話しやすい雰囲気グループワークを作ってください、見失っていた大事な思いを再確認できたように思います。次に繋がる前向きな気持ちになる研修になりました。ありがとうございました。

第2回麦の郷福祉大学が9月28日(土)に開催されました。

講師は立命館大学特任教授の唐鎌直義先生で、テーマは「人々の暮らしと福祉ー私たちの暮らし」

しとその特徴」でした。先生は、資本主義社会における社会保障や福祉制度の性格とその重要性を講義して下さいました。資本主義社会では国民のほとんど、96%くらいが労働力を売らないと生活ができません。だからこそ職に就くということがとても大きな意味を持っていることでした。しかし、どんな仕事でも選り好みをしていくべきだという事は大きな間違いであると話されました。また労働力というのは「特殊な商品」であり、自分の生命活動と自分の労働力が一体化されることです。働くことは命を売る事と同義ですから、命は徹底的に保護されなければならぬとの指摘がありました。労働者が働けない状態になった時でも生活できる道を用意しなければなりません。「待った」が効かないときには、国が生活を支えなければいけません。しかし、現在の日本ではその社会制度や福祉制度が後退しており、労働者として生きていくためには、社会保障や福祉制度が徹底して守らなければならないとの指摘がありました。また福祉職員は、障害がある人の思いを代弁していかなければならず、みんなが団結して生きていかなければならないと話されています。

そして、10月19日(土)に第3回麦の郷福祉大学が開催されました。講師は佛教大学教授の鈴木勉先生で、「福祉を発展させる力」がテーマでした。憲法改正案から見えてくる社会保障と共同作業所運動から福祉を発展させるチカラについて講義してくれました。現在の憲法改正について、9条や25条について話題になることが多いが、実は24条(家族、婚姻等に関する基本原則)にも着目する必要があると指摘されました。安倍政権の下、福祉政策では「自助」を最優先に位置づけ、次いで住民相互の「互助」、そして社会保険制度を指す「共助」が続き、最

2019年度 実践検討会

去る9月25日、2019年度の実践検討会が開催されました。実践検討会は、麦の郷教育研修委員会主催で、事業所からのレポート発表とグループワークを行い、実践を深めていく研修会です。今年度は昨年度までとは少し違って、年2回の開催と回数は減りますが、レポートはこれまで同様4本出してもらい、より密度の濃い検討会になればと思っています。

さて今回は、労働支援をテーマに、ソーシャルファームピネルの勝山さんと障害者就業・生活支援センターつれもての松岡さんから、発表してもらいました。

勝山さんからは、事業所での労働支援として「働く保障だけでいいの？」、「働く環境をどう作ったらいいの？」、「人生の豊かさは何だろうか？」といった問いかけがあり、この2年間で、給料保障に偏っていた支援を、仕事を調整したりして、もっと仲間に寄り添えるように皆で改革していった経過を話してくれました。



松岡さんからは、一般就労への支援として、つれもてではどのような支援をしているのか、また、実際の事例の中から、車イスでの移動が必要な方が、バス通勤をするにあたってバス会社との交渉等、具体的な支援についての話でした。

グループワークでは、自分の事業所の事もふまえて話し合いましたが、時間が足りずに時間切れというグループもありました。ただ、各事業所でも共通する点もあり、意見も出し易かったのではないかと思います。

現場では、毎日必死に実践を行っていると思いますが、この検討会の内容を現場に持ち帰って、さらに深めてもらえればと思っています。

次回は、11月27日開催です。テーマは「余暇活動支援」です。互いに学び合い実践を高め合しましょう！

（麦の郷教育研修委員会 山本 哲士）

「笑顔と元気」に つながる学びを！

麦の郷では、入職5年以上を経過した中堅職員を対象とした「スキルアップ研修」を今年度から実施しています。

対象者は法人の経営会議が推薦する常勤職員で、麦の郷の哲学や歴史を深く学び、実践や運動、経営の担い手になる職員を養成することを目的



され実践が高まり、仲間たちや職員の「笑顔と元気」につながれば嬉しいです。次回来月2月の研修にも良い学びが期待されます。

（麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所 鈴木 栄作）

今年も出品！

「わかやま産品商談会in和歌山」

地元和歌山の様々な製造生産者が集い「わかやまの産品」を和歌山県はもちろん京阪神の卸業者や小売店、飲食店などに広く知ってもらい販売に繋げていこうという催し「わかやま産品商談会in和歌山」が9月6日（金）和歌山ビッグ愛にて開催されました。

わかやま産業振興財団が主催するこの商談会は年に2回和歌山県と大阪府で開催されており和歌山県の食品流通課もとても力を入れているイベントとあって当日は仁阪知事も激励のあいさつに訪れ出展ブースをめぐりながら試食や地元出品者と言葉を交わしていました。

麦の郷がこの商談会に出品を始めたのが今からおよそ13年ほど前になるでしょうか。当時の麦の郷ブースは非常につましやかに納豆やせんべい、ジュースが並べられ周りの業者ブースとは遥かにかけ離れた野暮ったいブースだったことを今でも鮮明に記憶しています。あれから十数年麦の郷はそんな野暮ったい記憶を払拭す

べくこの商談会に出品をつけています。

（写真参照）
その甲斐あってかここ最近の小売業者やバイヤーと呼ばれるスーパーや百貨店の買い付け人の麦の郷ブースへの近づき方が依然とは違ってきているように思えるのです。買い付け量は少量でも本当に良い品物に目を向けてくれるようになりだしたので麦の郷の加工品がそういったニーズにどうやらマッチしてきているようです。そうです時代がやっと麦の郷に追いついてきたのです。（勝手にそう思っているのです）



とはいうものの商談成立に至るケースはさほど多くなくバイヤーからの見積もりやサンプル依頼に対応するものの「空振り」に終わってしまうことがほとんどで期待して即心が折れるというのも事実。なかなか大変な取り組みなの「商談会出品」なのです。

麦の郷が出品を続けるなか商談会への福祉事業所の参加数は伸びていません。過去出品していた事業所も出品を取りやめてしまっています。

「実を結び」営業活動としてこの商談会を好機ととらえられる福祉関係者を少しでも増やしていけるよう麦の郷ブースは少々野暮ったくても出品を続けていきたいと思っています。

（はるま共同作業所 和の杜 大中 一）

としています。年に2回、4講座で計4時間の講座で学びを深めます。

9月20日に今年度1回目の研修が開催されました。4名の受講者で、山本理事長の「障害者福祉の情勢」の講座と鈴木より「麦の郷の哲学」の講座を学び合いました。少人数でしたので講師と掛け合いながら和やかな研修となりました。受講者の感想として、「日本の社会の動向をおさえた上で、障害をもつ人たちがどういう状況におかれているか？という実状をみるころが、支援の第一歩だと感じた」「権利を闘う、今の社会。負担や制度など色々悩まされますが、支援を必要とする方にとって良い社会になるよう、訴えて、叶えていきたいと思う」「自分が思いあがっていたと感じた。福祉は利益ではなく保障、今の自分は利益を求めていました。自分は社会に流されていると、言い訳してないか？」「無関心でもできてしまう職場ということ...それはイコール子どもたちの小さな変化やSOSにも関心がそこにないと、すぐに起きてしまうということ、それはあってはならないこと、とてもこわいこと。職場では共に成長し合える場でありたい。」などが寄せられました。



今回の学びが其々の事業所にフィードバック

むぎ・わくわくレポート10

私の所属する和歌山生活支援センターは午後から、登録者が自由に利用できるスペースがあります。そこには、生活の課題をたくさん抱えた方も来てくれます。食事が大幅に偏っている方、入浴や洗濯などの衛生に関して問題ありの方などなど。

当センターにはたくさんのお母ちゃんスタッフがいいますので、ついつい口うるさく「今日はお風呂入らなアカンで!!」「明日は着替えて来てよ!!」等耳の痛いことを言ってしまう。

そんなセンターでもみんな立ち寄ってスタッフに声をかけてくれたりする事が多々あります。スタッフ自身が気付いていない体調不良時に「〇さんしんどそうやなあ無理したらアカンで」とか用事で出たり入ったりしていると「今日は忙しいやな、まあゆつくりしてよ」等など。

別の日に別のメンバーが、作業所の自主製品を販売に来てくれた時にはドアの開け閉めをサツとしてくれたり。

スタッフの髪型や服装が変わった時にはすべに気付いて声をかけてくれます。スタッフの細やかに気づかなければいけないのですが、それ以上に仲間のみんなが気付いて、それをほっこりする言葉で表現して共有させてくれます。

これからも口うるさいお母ちゃん健在ですが、仲間のみなさんどうぞよろしくをお願いします。

（和歌山生活支援センター 木下 裕子）



『ニフレル』日帰りレクリエーション 和歌山生活支援センター+六星舎

9月7日(土)に和歌山生活支援センターと六星舎の合同で生きているミュージアムニフレルに日帰りレクに行つて来ました。台風の予報が心配されていましたが、大きくズレ、汗ばむほどのいい天気でした。

当日は和歌山県が障害者の社会参加の推進を目的として所有している福祉バスをお借りして、ハイエースと2台でニフレルへ。バスの中ではカラオケ大会が開催されました。イントロで誰の曲か当てたり、手拍子をしたり一緒に口ずさんだりと大盛り上がり。大阪に着くとまずは昼食。「あい鶏」で鶏料理をメインとした御膳を頂き、お腹が空いていたのかご飯を4杯もお代わりした仲間もいました。

ニフレルでは8つの「ふれる」を体験。
「わぎにふれる」ではドクターフィッシュに触れることが出来、みんなで指を一緒に水槽に入れ、誰の所に一番寄って来るのか?と勝負をしました。初めての感覚に「へっすべっすたい!」と、みんな笑顔。

「うごぎにふれる」ではそれまでじっとしていたペリカンが突然視力障がい仲間の頭上を飛び抜ける珍事。「風来た〜!!」と喜び、驚いていました。「みずべにふれる」ではホワイトタイガーの迫力のエサやりを間近で体験。ホワイト



タイガーの「アクア」がエサの付いたおもちゃにジャンプで飛びつく観客からは「おお〜」と歓声。アクアが観客の頭上のタイガーウォークを歩くと息遣いが聞こえてきそうなほどの距離感で、「肉球見えた〜」と嬉しそうなお仲間。お買い物タイムでは、魅力的な商品に釘付け。自分へのお土産、家族へのお土産を楽しそうに選んでいました。帰るころには仲間同士の親交も深まり、日常では体験できない、たくさんの感性にふれることが出来ました。

「次はどこへ行くのかな?」とすでに次回を楽しみにしているようです。
(六星舎 森 千春)

立命館大学 山本ロミ フィールドワークに参加して

ハートフルハウス 創

僕は創に入つて3ヶ月弱になったばかりで、今回の山本ゼミフィールドワークに初めて参加させて頂くことになりました。普段若い学生さん達と触れ合う機会も少なく、緊張しましたが最初の学生との交流である餃子の食材争奪戦や、バーベキューでは親睦が深まり、その後の議論でも勉強させて頂き、大変楽しかったです。

今回テーマとなる「なじむ」について、僕は中学生の頃から「クラス分け」ということにずっと違和感を持っていました。それは40名程度の中で仲良くしなさい(なじみなさい)という違和感です。

議論の中でもそういった意見もあり、いつの時代でもあることなんだと感じたと共に、この「なじみにくさ」がネット社会(SNS)の普

及によりさらに加速化しているんじゃないかと感じました。

対人関係に対して、気を遣う事が悪いとは思いますが、友達や周囲、環境、SNSと多くの学生達が気を遣っているのを目の当たりにし、対人関係のつくり方(人の目を気にしたり、うまく距離感を保つなどの付き合い方)で、メンタル面が疲弊する人も多くいるんじゃないかと感じました。



個人的にはメールやSNSは嫌いで相手の表情や仕草、声のトーンなどが分からない状態で文章だけで伝えることは大変難しいと感じています。直接会つ事を僕は大事にしています。

テーマに戻るとある歌の歌詞で「白か黒かで答える」という難題を突きつけられぶちあたった壁の前で僕は迷っている。迷っているけど、白と黒の間に無限の色が広がっている、君に合う色を探して...」というのがあります。

自分の色はなんだろう? 集団の色はなんだろう? 一色なのか、グジヤグジヤに混ざった色なんだろう?か?

集団になじむことが正しくて、なじめないことが悪いことなのか? 疑問は尽きませんでした。

さらに「なじむ≠なじめない」の間には、なじみたくてもなじめない人、なじむことを必要としない人がいること。

結論として、自分を認めること、相手を認めること、から何か一歩進んでいけるような気がしました。

「みんなと同じ」や「枠組み」のようなものに当てはめられるのではなく、個人がもっと尊

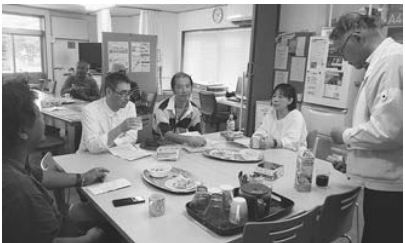
なかま「2時やで〜」、スタッフ「はい。はじめましょう!」といった声掛けとともに好きな飲み物をいれ、好きな席につき、ゆったりとスタートします。

各テーブルにあるお菓子をつまみながら、お互いの活動の報告や就労、家族や人間関係の想いなどをしんみり語り合ったり、かたやテレビ番組、スポーツやドラマの話でワイワイもりあがったり、毎回いろんな話題が飛び交います。

ゆったりカフェは、毎回参加のなかま、就労後に途中参加するなかま、この行事のみ参加するなかまが来所し滞在時間もさまざまです。今回この原稿を書くにあたり改めて感想をきいてみました。みんなでお菓子を食べるとおいしいし、一緒に話をするのが楽しい、情報がぎけるし、和やかな雰囲気がいっぱい話してくれまし

また、支援センターで月に一度発行しているアドボカシーを2回目のゆったりカフェの時に配布します。それには、来月の行事予定が記載されているので手元に届いたら、来月の「レクは何かかな?」「このレクいきたいけど仕事、休みとれるかな?」「早速「僕、このレク行くわ〜」「今度一回〇〇に行ってみよう!」、「フーメン屋さんにみんなで行きたいな」と提案してくれることもあり、日頃レクリエーションを考えるのに頭を悩ませているスタッフにとっては大助かりです。

ゆったりカフェなど支援センターの行事の参加は、登録したなかまが対象です。利用を希望される場合は一度、支援センターまでご連絡ください。



ひびのあたがみに触れた 和歌山南紀への旅行 お作業所

9月12日〜13日、19日〜20日とくろしお作業所たんぼぼ班のなかまが2グループに別れ、和歌山県の串本・太地町方面に旅行に行ってきました。



1日目は道の駅たいじで昼食後、くじらの博物館に。イルカやくじらの迫力満点のショーを観覧し、くじらに間近で餌をあげ、イルカに触れ、一緒に記念撮影。くじらの博物館のスタッフの方が仲間いろいろと配慮してくださり、とても良い経験をたくさんすることができ、仲間笑顔と歓声が溢れていました。くじらの博物館でお土産を購入し、宿泊先のホテル&リゾート和歌山串本へ。夕食は懐石料理。次から次へと出てくる季節の美味しい料理に舌鼓をうち、仲間達は満足。

2日目はリゾート大島へ。(①グループ目は、2日目があいにくの天候のため、とれとれ市場と京大水族館に行程を変更しました)トル

コガラスのコースター作り体験を。色や形が様々なガラスの中から好きな物を一つずつ選び、コースターの中に並べていきました。みんな真剣に取り組み、普段作業所では見ることのできないなかまの表情が見られました。コースター体験が終わわり、昼食はバーベキュー。熊野牛のステーキに、サザエ、鹿肉のソーセージなど、食べきれないぐらいの量のお肉や海産物、その地の名産を頂くことができました。今回の旅行は、行く先々で人の温かみに触れた旅行でした。訪れた先の施設のスタッフの方たちが、私たち職員と共に仲間たちがどうすれば楽しめるのかを一緒に考えてくださり、仲間の笑顔をたくさん引き出してくれました。本当に充実した楽しい二日間を過ごすことができ、帰ってきてから約一カ月が経ちましたが、未だにまだ思い出話が尽きません。

お作業所 川崎 愛香

『ゆったりカフェ』の開催 和歌山生活支援センター

麦の郷和歌山生活支援センターでは、月2回14時から16時に『ゆったりカフェ』という行事を開催しています。

当日は、12時の支援センター開所とともに、楽しみにしてくれているなかまがぼちぼち集まり、スタッフと一緒に昼食をとったり、近況報告をしてくれたりと時間が過ぎます。そして開始時間の14時頃には10人ほど集まっています。

スタッフは、コーヒー、紅茶、お茶など飲み物とお菓子を準備します。毎回、お菓子は少しですが話題のお菓子や季節にあったお菓子など何種類か選んでいます。

きょうされん40周年記念映画
「星に語りて」「夜明け前」和歌山市上映会

日時：2019年12月13日（金）

- ・14：00～ 星に語りて
- ・17：30～ 夜明け前
- ・19：00～ 星に語りて

場所：和歌山県民文化会館 大ホール
（バリアフリー上映会も開催）

【チケット価格（前売り）】

一般1000円 / 中高生800円 / 障害者・小人500円



※当日は各200円増しになります。麦の郷各事業所にて販売中！
※きょうされん第43回全国大会 | N和歌山のプレ企画も開催予定

助成ありがとうございました
【赤い羽根の共同募金】

こじか園

こじか園で、子どもが音楽リズムをする時や保護者の学習会の時などでワイヤレスアンプを使っていますが、購入してから(23年経ち、古くなり音声割れてしまったり、コード部分が曲がって接触不良を起こしていました。ワイヤレスアンプを頂き、保護者学習会での録音もUSBで簡単にできたり、音楽リズムの時は、電子ピアノの音を正確な音声に変えて子どもたちの耳に届けることができます。何よりも子どもたちの音に対する反応が以前と違うことを感じ、これから大切に使いしていきたいです。(こじか園 尾崎 由加子)



パフ菓子・商品紹介

ソーシャルファームもぎたて加工部では、お米で作ったパフ菓子を製造しています。このパフは、加水したお米をパフマシーンの中で一気に加熱し膨張させたもので、ポン菓子のようなものです。プレーンと黒糖味があり、紀ノ川農協のファーマーズマーケット「ふうの丘」で販売しています。口に入れたらサクサクとした感触で、やみつきになるお米のパフ菓子をぜひ食べてみて下さいね。従業員一同、愛情込めて作ってお待ちしております。

(ソーシャルファームもぎたて 中原 力哉)



むきのひと



第二こじか園
山本 祥久

今から5年前の2014年、こじか園で働き始めました。2018年からは第二こじか園に異動になり2年目になります。それまでは保育園で勤務をしていました。こじか園で働き始め、自分の中で大切にしていることが、目に見える「できる」「できない」ということに重点をおくのではなく、目には見えない「気持ち」や「心」を育てていくことを大切にしています。子どもたちと関わる中で、やらせるのではなく、子どもたち自身が主体的に「やってみたい！」と思える働きかけを考えています。子どもたちも大人も一緒。それぞれ自分のペースがありますので、それぞれのペースを守り、時に「見ての参加」もしっかり保障をして、その積み重ねの力が先の成長につながると信じて関わっています。「これからも変わらない大切にしていきたいこと」と「変わっていく大切にしていきたいこと」をその年どしで考えながら働いていきたいと思っています。

イラスト：KAN-Z

令和元年（2020年）
子歳
年賀状印刷
ご注文受付中!!
ご注文はFAXでもOK!
年賀状印刷
承ります
麦の郷印刷
TEL 073-464-3707
FAX 073-464-3708